

亡命者たちの社会学

——ラザースフェルドのアメリカ／アドルノのアメリカ——

奥村 隆

1. はじめに——亡命者たちとアメリカ

ハンナ・アーレントは、1943年の「われら亡命者」という文章で次のように述べている。

われわれは、生まれ故郷を喪失した。これは、日常生活への慣れ親しみを喪失したということである。われわれは、仕事を失った。これは、この世界でなんらかの役に立っているという自信を失ったということである。われわれは、言語を失った。これは、自然な受け応え、無理のないそぶり、感情の気どらない表現を失ったということである。われわれは、親類をポーランドのゲットーに残してきたし、われわれの最良の友人たちは強制収容所で殺された。これは、われわれの私的關係が切り裂かれたということである。(Arendt 1943=1989: 10)

ユダヤ人であるアーレントは、故国ドイツをナチスが政権掌握した後の1933年秋にパリに逃れた。だが、1940年5月フランスにとっての「敵国人」として抑留収容所に収容され、パリ陥落後の混乱で収容所から出て、1941年1月にフランスを出国、リスボンを経て5月にニューヨークに辿り着く(Young-Bruehl 1982=1999: 173-234)。彼女がアメリカ市民権を獲得するのはようやく1951年であり、18年間にわたって彼女は国籍を喪失した「何ら特定の法や政治的協定によって保護されない、生身の人間以外の何者でもないとい

う人間」(Arendt 1943=1989: 28)であるという地点に置かれたことになる。

このような地点から「社会」を見ることは、同じアメリカ社会にいてもアメリカ生まれの人々とは異なる像を結ぶことだろう。それは、たとえばコロラド生まれのプロテスタント・エリートだったタルコット・パーソンズのそれとも、ユダヤ系でフィラデルフィアのスラム出身のロバート・マーティンのそれとも同じではないと思われる¹⁾。

ローラ・フェルミ(原子物理学者エンリコ・フェルミの妻、イタリアからの亡命者)の『亡命の現代史』によれば、1933年から44年までの期間にヨーロッパからアメリカに移住した教師を含む知的職業従事者は約2万3千~5千人と推定される(Fermi 1968=1972: 13)。彼らはヨーロッパにおける独裁の成立とともに政治的理由、信仰や人種差別による迫害を免れるためにアメリカに來たが、これは「芸術、学問、科学の領域でこれほど卓越した知的才能の持主が集中して移民したことはかつてなかった」という、それまでとは根本的に違う現象だった(ibid.: 5)。そのうちユダヤ人が大きな割合を占めたことはまちがいない。当時のドイツで全人口に占めるユダヤ人の比率は0.9%だが、大学教授は12%以上がユダヤ人だった(ibid.: 52)。1933年4月にヒトラーが出した文官追放令はユダヤ人、ユダヤ混血、左翼主義者・自由主義者をすべての公職から追放するというもので、数多くの大学教授・講師がポストを失った(ibid.: 63)。また、ロシア、ハンガリー、イタリアなどでも独裁の成立とともに、多くの知

識人がアメリカに移住することになる。たとえばロシア出身の『ロリータ』の作者ウラジミール・ナボコフ (ibid.: 54)、ハンガリー出身の経済人類学者カール・ポランニー (ibid.: 71)、イタリア出身の指揮者アルトゥーロ・トスカニーニ (ibid.: 9-11) など。独逸併合とナチスの法律によってオーストリアを追われた知識人も、1938～39年に大量にアメリカにやってきた (ibid.: 116)。

こうした亡命者たちに対しアメリカの大学は受け入れのために素早く動いた。1933年5月には「ドイツ人(のちに外国人すべて)追放学者救援緊急委員会」が大学学長たちによって結成される (ibid.: 93)。これは、アメリカの大学が自由のために強力な戦いができ、ヨーロッパの優れた人材を教授陣に迎えて充実できることを彼らがすぐ理解したことによる (ibid.: 87)。こうした取り組みのなかには、ニューヨークの「ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ」の創立者アルヴィン・ジョンソン (1921年から45年まで学長) による「亡命者大学」の構想もあった(ここにはアルフレッド・シュッツが在籍した)。ドイツに知己の多かったジョンソンは1932年に渡独してその事態を憂慮し、翌年追放学者のリストに「創造的精神をもっているほとんどすべての社会学者の名」を見て、ドイツの学問を守りアメリカの学生にそれを紹介する機関をつくらうと考えた。彼はニュー・スクール内にフランスやベルギーから来た難民たちのために「高等学術自由大学」も創設し、多くの学者、科学者、美術家、音楽家などの難民に仕事を与えた (ibid.: 92)。

フェルミは人名録や伝記などの資料から1900名の知識人移民のリストをつくり (ibid.: 13-6)、移動した時代や出身国別に分析を加えているが、ここでは省略しよう。以下では、その44%を占める最大グループのドイツ人、20%を占める第二グループのオーストリア人からひとりずつその後の社会学に重要な影響を与えた人について検討したい。ただ、この現象についてもうひとつ付

け加えるべきだろう。同じ知識人の亡命を扱った『大変貌』のなかでスチュアート・ヒューズは「亡命者たちの到来がアメリカの知的世界を豊穡にしたことを知っている」と述べたうえでこう記す。「われわれはそれが、ヨーロッパにとっては損失であり、この大陸はそれから回復するのに2、30年も要したことも知っている」(Hughes 1975=1978: 3)。これは社会学にとってもあてはまり、多くの亡命社会学者の知的影響によりアメリカ社会学は発展をとげるが、ヨーロッパの社会学はヒューズの表現が正しければ1960～70年代まで彼らの流出による損失から立ち直ることができなかった。

さて、次節ではまずオーストリア出身のある亡命社会学者を検討したい。彼はポール・ラザースフェルド (Paul F. Lazarsfeld, 1901～76)、ウィーンから亡命してきた社会学者であり、コロンビア大学でマートンと共同研究を行って重要な業績をあげるとともに、アメリカで組織的な社会学的調査研究を創始したとされる人である。

2. ニューヨークのラザースフェルド ——民主主義と資本主義のアメリカ

【1】社会学者エドワード・シルズは、1930年代後半の社会学はアメリカでもヨーロッパでも「乱雑な様相を呈していた」と述べ、「アメリカでは相互に関連性のない個別的な調査がすでに山をなしていたが……なにも共通点がなかったというのが実情」であり、「現在われわれの知っている一貫性のある社会学的な見方は、時たま覆いをかけたままあらわれるだけであった」と述べている。彼は、その稀な社会学者のひとりとしてポール・ラザースフェルドをあげる (Fermi 1968=1972: (2) 153-4)。ラザースフェルドは「社会現象の実証的研究の標準的な手続きとなった多くの技術——その大部分が数学的なものであるが——を発展」させる役割を果たし、コロンビア大学に応用社会学部を設立して弟子や助手たちを通じてアメ

リカ全土の社会学部や研究所のリーダーとなっていた (ibid. : 157-8)。

自身もベルリンからの亡命者で、コロンビア大学で博士号をとった社会学者ルイス・コーザーの『亡命知識人とアメリカ』に、ラザースフェルドの生涯が簡潔に記されている。弁護士の父、精神療法医の母というユダヤ人の両親のもとウィーンで生まれた彼は、母の愛人で社会主義の指導者フリードリヒ・アードラーの影響を受け青年時代に社会主義運動に没頭する。アードラーは理論物理学者でもあって、ラザースフェルドは自然科学や数学にも関心を向け、応用数学で学位をとりギムナジウムで数学と物理学を教える。その後ウィーン大学に新設された「心理学研究所」で統計学を教えるよう依頼されるが、彼の関心は社会主義がなぜオーストリアで成功しないのかを心理学的に解明することに向かい、1932年に『マリーエンタールの失業者』という失業者コミュニティの実証研究を発表する。当時の彼の言葉を引くならば、「戦いつつある革命は経済学を必要とし (マルクス)、勝利した革命はエンジニアを必要とし (ロシア)、失敗した革命は心理学を求める (ウィーン)」! (Coser 1984=1988 : 120-2, Lazarsfeld 1969=1973 : 186)

この研究で注目されたラザースフェルドは、ロックフェラー財団からアメリカへの研究旅行奨学金を与えられ、1933年9月に渡米して多くの社会調査研究所を視察したのち、ニューアーク大学学長の依頼で同大学調査研究センターを発足させる。ここで彼は製品販売のための市場調査とアカデミックな調査の両方を行い、前者で得た外部資金によって後者を実施するというスタイルを確立した。1936年、ロックフェラー財団によってプリンストン大学に設立された「ラジオ調査研究室」に招かれるが、中心となったハドレー・キャントリルとの関係が悪くなり²⁾、1939年に「研究室」をコロンビア大学に移転、1940年には同大学社会学部のテニユアとなって1969年の停年退職までそこで教えることになる。1944年には

「ラジオ調査研究室」が「応用社会調査研究所」となって、50年代までその所長を務め、ラジオ産業の研究資金や政府委託の資金などを複数の研究計画に融通し合って調査を進める財政運営を行ったという (Coser 1984=1988 : 123-6)。

コロンビア大学で彼は講義やセミナーで多くの学生に影響を与えるとともに (ジェイムズ・コールマン、マートンの指導学生ピーター・ブラウ、アルヴィン・グールドナーなど)、数十年にわたりマートンと緊密な協力のもと研究を進めた。マートンが理論研究に集中し機能分析によって行動の構造的文脈を解明するのに対し、ラザースフェルドは経験的な調査研究に集中し行動の動機に焦点をおくという補完関係にあり、ふたりはつねにアイデアを交換して、1940年代から60年代までコロンビア大学社会学部は「社会学理論と経験的調査研究とを統合する」モデルとなったとコーザーは述べている (ibid. : 129)。

【2】では、ラザースフェルド自身の問題関心はどこにあったのか。ここでは、1944年の『ピープルズ・チョイス——投票者は大統領選挙においてどう意思決定するか』(B. ベレルソン、H. ゴーデットとの共著)、1955年の『パーソナル・インフルエンス——マス・コミュニケーションの流れにおける人々の役割』(E. カッツとの共著)を見てみよう。

『ピープルズ・チョイス』は、1940年のアメリカ大統領選挙での人々の投票への意思決定をオハイオ州エリー郡で600人へのパネル調査により検証しようとする。同年11月の大統領選は、ヒトラーがオーストリア、ポーランド、チェコを占領し、予備選中にフランスに進駐するという緊迫した時期に行われ、民主党候補ローズベルトが共和党候補ウィルキーを破り大統領に再選された選挙だが、その投票行動はなにに影響されたのだろうか。

ラザースフェルドはまず社会経済的地位や宗教などの条件が政党支持にどう影響するかを検討し、

社会経済的地位が高く、プロテスタントで、農村部に居住することが共和党支持に、その逆が民主党支持に人々を傾かせる「先有傾向」があるとし (Lazarsfeld et al. 1944=1987: 80)、この傾向は投票まであまり変わらないとする。政治に高い関心を持つ人々は早くから投票先を決めており、キャンペーンの影響でそれを変えはしない。支持政党を変更する人は8%ほどいるがこれは政治的関心の低い人たちであり、キャンペーンやマスコミの情報にはあまり接しない (ibid.: 124-8)。各陣営のキャンペーンの影響は、政治的関心の高い=すでに支持を決めている人たちの支持を「補強」し、関心の低い=まだ支持を決めていない人にはその先有傾向を「顕在化」する(その通りに投票する)効果をもっただけだったとラザースフェルドはいう (ibid.: 165)。

では、支持政党を変更した人たちはなにに影響されたのか。ラザースフェルドは、キャンペーンやマスコミ接触よりも対人接触の効果のほうが大きかったと主張し、とくにどちらが勝つかの期待が他の人々との会話により変更されることで投票先を変えることが多かったという (ibid.: 171)。支持を変更した人たちは政治的関心が低く、マスコミにあまり接触しておらず、マスコミへの接触は政治的関心が高く支持を決めている人たちに集中している。つまりキャンペーン・プロパガンダは「もっとも変更しそうな人びと」に届き、「もっとも変更しそうな人びと」には届かない (ibid.: 193)。しかし、支持を決めているマスコミに接触する人たちは「オピニオン・リーダー」に、支持を変更する可能性がある関心が低い人たちが接触することで、後者の投票行動が変わることがある。この接触は同じ種類の人たちの間で起こることが多く、この「パーソナルな関係」によって同種の人々がつくる「社会集団の政治的同質性」が高められる (ibid.: 220)。ラザースフェルドは、投票行動は「本質的に一種の集団経験である」といい、ともに働き生活し遊ぶ人々は同一の候補者に投票する傾向があると主張する

(ibid.: 206)。

ここから「コミュニケーションの二段階の流れ」図式が案出される。「観念はしばしば、ラジオや印刷物からオピニオン・リーダーに流れて、そしてオピニオン・リーダーからより能動性の低い層に流れる」(ibid.: 222)。政治キャンペーンやマスコミが人々に直接影響を与える力は予想ほど強くなく、むしろ人々が集団内で他の人々とパーソナルに接触し、間接的にマスコミのキャンペーンに触れることではじめて効果が生じる。投票を決めていない人や迷っている人を動かすのはマスコミではなくパーソナルな接触、とくにオピニオン・リーダーとの接触ではないか。「結局、人間を動かすことができるのは、なによりも人間である」(ibid.: 231)。ラザースフェルドは大統領選挙を事例に、アメリカ社会で小集団やパーソナル・コミュニケーションのもつ意義を発見した、ともいえるだろう。

この延長上に著された『パーソナル・インフルエンズ』は、人口6万人ほどの都市イリノイ州ディケーターを調査地とし、じっさいにだれがオピニオン・リーダーで、いかにしてフォロワーに影響を与えるかを調査したものである。『ピープルズ・チョイス』の結果が示すように、マス・メディアは「タウン・ミーティング」のように民主的な世論形成を可能にするのでも、大衆に強力に働きかけて民主的社会を破壊するものでもなく (Katz and Lazarsfeld 1955=1965: 3-4)、メディアとマスのあいだには「対人関係という介在変数」がある (ibid.: 7)、このことを直接検証しようとするのだ。具体的には、多様な階層・年齢の女性800人に買い物、流行、社会・政治的問題、映画観覧について、影響を受けた人、影響を与えた人を質問し、影響者—被影響者関係を追跡する方法をとる (ibid.: 138)。

この調査ではマス・メディア接触と対人関係の効果の比較もされるが、ここではパーソナルな影響の流れそのものに注目しよう。ラザースフェルドは女性たちを生活歴(未婚/既婚、年齢、子ど

もの数など)、社会経済的地位(家賃と学歴)、社交性(友人数と参加集団数)で分類し、だれがオピニオン・リーダーかを分析する。4つの項目のうち買い物(≒資本主義!)と政治的問題(≒民主主義!)について見ると、買い物行動では生活歴で「大世帯主婦」、社交性で「高」に分類された女性たちがオピニオン・リーダーとなる。こうしたリーダーはどの社会的地位にもほぼ均等に散在し、対人的影響は同じ地位の者同士で交換されることが多く、いわば「水平的な影響の流れ」が存在する(ibid.:240)。これに対し政治的問題のオピニオン・リーダーは社会的地位が「上」の女性に偏っている。想像がつくように家族内で夫や親に影響されるという場合も多いが、家族外を見ると同一地位の影響は買い物や流行よりも少なく(それでも44%は同じ地位同士だが)、ホワイトカラーの主婦が実業者や専門職の主婦に助言を求めるといった形でより上の地位の者が下位に影響を与えることが多い(ibid.:280-2)。これは「垂直的な影響の流れ」ともいえるだろう。また、社交性はオピニオン・リーダーとなる重要な条件だが、生活歴の相違は買い物や流行ほどその出現率に関係をもたない(ibid.:297-8)。

ただし、いま44%という数字をあげたように、政治的問題についても影響の流れが「もっぱら上位あるいは威信の高いものから低いものへと下降的に流れる、垂直的な過程である」という仮定はあてはめられないとして、ラザースフェルドはこう強調する。「対人的な影響過程についてのいかなるイメージも、今や、水平的なオピニオン・リーダーシップをも含んだものであるというふうに訂正されなければならない」。オピニオン・リーダーは「コミュニティの全域にわたって、社会経済的な階梯のそれぞれのレヴェルに、普遍的に存在している」(ibid.:331)。意思決定はマス・メディアによって強力に影響されるのではなく、オピニオン・リーダーが中継することによって意思決定に影響を与える。その影響関係も、社会的地位が上のリーダーが下のフォロワーに影響

するのではなく、同じ地位の人々のなかにオピニオン・リーダーが生まれ、水平的に影響を与える。

ラザースフェルドは、アメリカ社会にこのような意思決定プロセスが存在することを実証してみた。この「亡命者による社会学」をどう評価すればよいだろうか。

【3】コーザーの『亡命知識人とアメリカ』に戻ろう。おそらく彼自身の体験を反映したものと思われるが、彼はその「序論」で亡命知識人がアメリカで経験したことを次のように描いている。彼らは故国で社会的経済的にも知的世界でも高い地位と威信を獲得しており、低い階層出身の移民たちとは異なって、渡米後に威信喪失を経験しフラストレーションに陥る。「大学教授」の地位が得られない場合もあり、得られても故国での権威ある研究機関でなくカレッジやマイナーな大学だったり、教授への社会的評価が低かったりした。故国ではしなくてすんだ学部教育をせねばならず、負担に感じることもうまくやれず惨めな結果になることも多かった(Coser 1984=1988:3,6-7)。彼らは異邦人として、ヨーロッパとはまったく条件の違うアメリカに適応しなければならなかった。

このときふたつの条件が彼らの適応を大きく左右した。ひとつは、彼らの学問分野がアメリカでどんな状況にあり、受け入れ条件がどうだったかである。特定言語に縛られないエンジニアや物理学者などの自然科学、数理経済学や科学哲学、記号論理学などは受け入れられる可能性が高い。これに対し、ドイツの歴史学派の経済学者や現象学派の哲学者はアメリカの通常の大学に席を見出すことは困難だった。精神分析はそれまでのアメリカではほとんど注目されなかったが、亡命者たちがこれを持ち込み、新しい世代の精神医学者や知識人たちが熱心に受け入れるという幸福な結果が生まれた。逆にアカデミックな心理学はアメリカで行動主義が支配的だったため、ゲシュタルト心理学の3人の中心人物(ケーラー、コフカ、ヴェルトハイマー)は主要大学での職につけなかった

(ibid. : 5, 7, 9-10)。

もうひとつは、どれだけの亡命者が自分の周りにいたか、裏返しとしてどれほどアメリカの知的ネットワークに参加したか、という条件である。十分な数の亡命者仲間と社会的場を形成できた場合、彼らが影響を発揮する力となるが、数が多すぎると中央ヨーロッパ出身者の閉鎖的集団に閉じこもってしまいアメリカ生まれの知識人と交流を持たない傾向を生む。政治学者のフランツ・ノイマン（ドイツからの亡命者）は、亡命者知識人のうちには「自分の思考構造をあくまで保持しようとし、アメリカ型の思考を革新する使命があると考えたり、軽侮の念をもって自分の孤島にひきこもったりする」という類型があったと指摘する。これに対し、「これまでの知的立場を進んで棄てて、無条件で新しい方向を受け入れた学者たち」、「新しい経験を古い伝統と統合しようとした人たち」もいた (ibid. : 13)。とくに最後の類型は、特定の集団だけで通用する言語は使えないと知り、異なる背景をもつ同僚や仲間との出会いで得られる視野を自分のものにしようとして練り上げた語り口を作っていく、旧世界と新世界の「橋」となっていった (ibid. : 14)。

こうして、アメリカ社会で「周縁的」な存在であった亡命知識人たちは、置かれた条件によって、周縁のローカルな世界に閉じこもったり、ホスト社会に過剰適応したり、周縁性を活かして新しい知を作り上げたりした。それがもっとも生産的になった場合、彼らが受け入れ側の経験を完全に共有していないことによって「距離をとった知の形式」を作り上げ、内部の人間にとって習慣的な行動基準があれば十分なものに対して、それへの「分析的推論」を行わなければならない、それができるようになる (ibid. : 16)。

ではラザースフェルドはどうだったのか。コーザーは、社会心理学という学問がアメリカで未発展だが隆盛に向かう段階だったので、ラザースフェルドは自身重要な寄与をただけでなく、多数の学生を教育してこの分野を変える役割を果た

した、と述べる (ibid. : 10)。彼はアメリカ社会に見事に適応したといえるだろう。市場調査とアカデミックな調査研究を往復しながら研究組織をリーダーとして運営し、ヨーロッパにもアメリカにもなかった知の形態を開いていく。その成果はアメリカ出身者にとってありふれた経験（「水平的」影響関係など日常的なものだろう）を距離をとって解明するオリジナルなものとなった。

ただ、こうした成功にもかかわらず、彼はずっと自分がアウトサイダーであり完全には帰属していないという感覚をもっていた。ウィーンでの彼は社会主義を支持する聴衆に語りかけ受け入れられたが、アメリカには大きな社会主義運動は存在せず、彼の仕事は（市場調査は別として）大学の仲間、学生、研究者たちのみを聴衆とした。また彼は自分が「ユダヤ人の外見」をもつことを自覚しており、ユダヤ人ではなく「外国人」（オーストリア人）として受け入れられたと感じていた（彼ははっきり中欧の訛りを残しており、コーザーにドイツ訛りを全部なくすべきでないアドヴァイスしたという）。彼は晩年アメリカ社会学会会長に2回選ばれそこね、3回目に弱小候補と争ってようやく選出される。彼はアメリカ社会で劣等感や疎外感もちつづけ、同時にその感覚が、彼に距離をとってアメリカ社会を観察することを可能にしたともいえるだろう (ibid. : 131-2)。

さて、彼以外の亡命社会学者たちはどうだったのか。次節からはドイツからの亡命者テオドル・アドルノ (Theodor W. Adorno, 1903-1969) をとりあげる。じつは、彼は「ラジオ調査研究室」でラザースフェルドの部下として働いた人物である。おそらくラディカルな思想家でフランクフルト学派の中心人物という位置づけがされる彼が「アメリカ」をどう経験し、そこでどのような社会学を展開したかを、以下2節に分けて論じていきたい。

3. ニューヨークのアドルノ ——ラジオとジャズのアメリカ

【1】ラザースフェルドは渡米してきたばかりのテオドール・アドルノについて、プリンストン・ラジオ調査研究室副主任のハドレー・キャントリルとCBS放送の調査部長フランク・スタントンにこう報告している。

彼は貴方がたが想像なさると寸分たがわぬ、放心状態にあるドイツ人の教授のように見えます。しかも、彼の一挙手一投足は、あまりにも異様なのでメイフラワー協会の一員であるような感じをうけました。しかしながら彼と話を始めればわかりますが、彼は興味深い考えをおどろくほど豊かにもっていることがわかります。新参者にありがちなことですが、彼も万事を改革しようとしみます。しかし、彼の言うことに耳を傾ければ、その大半がそれなりに意味をもっていることがわかるでしょう。(Lazarsfeld 1969=1973: 220)

アドルノがアメリカに渡ったのは1938年2月で、プリンストン・ラジオ調査研究室の音楽研究部門主任研究員のポストを与えられて、つまりラザースフェルドが主任の研究プロジェクトの一員としてのことだった。異様なふるまいをする放心状態にあるドイツ人教授、それなりに意味をもつ改革をしようとする新参者というこの印象は、アメリカにおけるアドルノをもしかしたらかなりの確に表現しているのかもしれない。

テオドール・ヴィーゼングルント=アドルノ(「アドルノ」は歌手だった母親方のイタリア名で、アメリカ亡命後は父の姓ヴィーゼングルント(ユダヤ系とすぐわかる名)を名乗らなくなった)は、1903年にフランクフルトでキリスト教に改宗したユダヤ人の裕福な葡萄酒商の息子として生まれた(Jay 1973=1975: 25)。『弁証法的想像力』の著者マーティン・ジェイは、アドルノが属したい

わゆる「フランクフルト学派」は多くが中産・中産上層のユダヤ人家庭に生まれ(ibid.: 37)、その出自に反発してプロレタリアートとの連帯を熱烈に表明したが、決して「ブルジョワ上層の生活様式」を棄てなかったという(ibid.: 42-3)。

父の商売への興味は引き継がず母の音楽的素養に影響されたアドルノは、作曲をフランクフルトとウィーンで(アルバン・ベルクが師だった)学び、シェーンベルクの無調音楽に影響を受ける。他方1924年にはフランクフルトでフッサール現象学についての博士論文を書き上げ、のちにニューヨークで研究所の仲間となるホルクハイマー、ローウェンタル、ポロックなどと親密なサークルを結成する。ジェイによれば、「同じ仲間の結合を好む性向」と「文化的エリート主義」はアドルノの生涯変わらぬ特徴だった(ibid.: 25-7)。彼はキルケゴールの美学にかんする教授資格論文を書き、1931年に私講師となる(ibid.: 28)。

1933年1月30日のナチの権力篡奪後、アドルノはオックスフォード大学で4年ほど研究しつつ過ごす(ibid.: 35)。この間もしばしばドイツに戻っていたが、1937年6月にホルクハイマーの招きでニューヨークに数週間滞在し、この秋彼からのラジオ・プロジェクト研究員への誘いを受諾して、1938年にアメリカに渡る(Adorno 1969=1973: 30)。

簡単に、フランクフルト学派の拠点「社会研究所(Institute für Sozialforschung)」の成り立ちも見ておこう。「社会研究所」は1923年2月3日に文部省令により公式に創立された。これは、ドイツ生まれでアルゼンチンに移住した穀物商の息子フェリックス・ワイルがフランクフルトで学んだおりに社会主義に傾倒し、このための研究所を構想したことに始まり、彼の父の金や母の遺産を資金とした。当初「マルクス主義研究所」という名称が考えられたが、あまりに刺激的なので「社会研究所」というそっけない名前になり、1914年に創立されたフランクフルト大学に正教授とし

て籍を占めるという契約で同大学と提携する形で設立された (Jay 1973=1975: 6-10)。同研究所が最大の知的生産性を示したのは、1930年に当時 35 歳のマックス・ホルクハイマーが所長に就いてからの時期といわれる (ibid.: 29)。アドルノが研究所と関係を結ぶのは 1938 年以降だが、1932 年の新しい機関誌『社会研究年誌』創刊号に寄稿しており、社会心理学を重視したホルクハイマーの関心を受けエーリッヒ・フロムなど精神分析家たちも研究所に加わっている (ibid.: 32)。

しかし 1933 年のナチス政権成立後、4 月にはホルクハイマーがフランクフルト大学から解任され、ほとんどがユダヤ系 (ナチの基準では) で公然とマルクス主義を信奉していた「研究所」はフランクフルトから去らざるをえなくなる (ibid.: 34)。ジュネーヴ、パリ、ロンドンに支部をつくり「研究所」はなんとか維持されたが、安住の地はニューヨークに見出された。ホルクハイマーが 1934 年 5 月にはじめて渡米したとき、コロンビア大学学長ニコラス・マーレイ・バトラーと会い、同大学の建物のひとつに本拠を置くよう申し出を受ける。「研究所」は 1931 年に基金をオランダに移していて財政的には安定しており (対照的に「ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ」は資金不足に悩んでいた)、ふたたび集まった研究所メンバーは「ヨーロッパではじめての研究を大した支障もなく再開しえた」(ibid.: 44-9)。彼らはパリのフェリックス・アルカン社からドイツ語の『年誌』を発行しつづけ、「過去を振り捨ててアメリカ人になりきろう」とはしなかった (ibid.: 48)。つまり、前節末に引いた亡命者仲間との「閉鎖的集団」の条件を確保できた。

1938 年にニューヨークに渡りこのサークルに加わったアドルノは、その典型とっていい人物かもしれない。では、アドルノにとってアメリカとはどのようなものだったか。彼自身の証言と、彼の作品をいくつか紹介しながら、見ていくことにしよう。

【2】アドルノが晩年記した「アメリカにおけるヨーロッパ系学者の学問的経験」という回想の冒頭近くで、彼は「私は自分自身のことを徹底してヨーロッパ人だと考えている」と述べている (Adorno 1969=1973: 27-8)。「外国ですごした最初の日から最後の日に至るまで、自分自身をヨーロッパ人と考えていたし、それを否定したことは一度もなかった」、逆にいえば「私はアメリカ人ではない」と思い続けていた。その彼にアメリカはどのように見えたのか。「ニューヨークに来て間もないころ、われわれと同様、アメリカへ渡ってきていた一人の家政婦——彼女はいわゆる良家の出の娘だったのであるが——が、私に次のように語ったときのショックを、いまでもよく憶えている。『この町の人たちは以前はよくシンフォニーを聴きに行ったのですが、いまではラジオ・シティを聴くんですよ』。私は決して彼女のようにになりたいとは思わなかった。それに、たとえそうなりたいたくとも、私にはそれができなかったであろう」(ibid.: 28)。良家出身の娘が、コンサートで交響曲を聴くのをやめラジオを聴くようになる、これに彼は愕然としてしまう。彼にとってアメリカは、たとえば「ラジオのアメリカ」だった (その調査が彼の仕事だったが)。

前衛作曲家アルバン・ベルクの学生だったアドルノは、ラジオから流れる音楽について繰り返し考察する。まず、渡米以前の 1936 年に書かれた論考「ジャズについて」を見よう。この文章でアドルノは救いようのないくらいジャズを貶しており、その焦点はジャズが自発的な音楽にみえながらそれはにせのものだ、という主張にある。

まず彼は、ジャズのリズム原理であるシンコペーションをとりあげる。これはさまざまな変形がされるが、「つねに原形が見透かせるような範囲にとどまっている」。ヴァイオリンやドラムの響きは「突発的に見えながら同時に硬直したところ」がつかまとい、この硬直性をアドルノは何度も批判する (Adorno 1964=1969: 109)。そしてその根底には「ジャズは厳密な意味において商品

である」ことがある。シンコペーションなどの即興ふうなところは「それ自身が規格化されたもので、規格化された商品性格を糊塗するために、外部からこれにつけ足されたものでしかなく、ただの一時も商品性格そのものを制するにはいたらない」。ジャズにまつわる個性や自発性は売れ行きをよくするための意匠であり、自らの商品性格を隠そうとするにすぎない (ibid.: 114)。またジャズはほとんどの階級に浸透し、「隷属的な連中」はそれを受容することで「上流階級の仲間入りしたような気分」になるが、ジャズは「えせ民主的」であり階級差別についても欺いている (ibid.: 116)。それは出版社の資本力、ラジオによる普及、映画の存在が「抗しがたい宣伝機構」として「悪質な流行歌を大衆の脳裡に叩き込む」ものである (ibid.: 117)。

アドルノによれば、頹廢したヨーロッパ音楽がジャズの根源的な力によって再生できるという信仰は「一つのイデオロギー」であり、ジャズがどの程度まで真の黒人音楽とかかわりがあるかも大いに疑問がある (ibid.: 120)。ジャズは「太古の原始的なものの発現」ではなくて「奴隷の音楽」であり、「下女たちのひとり歌いの構造」を連想させる「下層階級」「飼いならした奴隷」に由来するものではないか (ibid.: 122)。ジャズでは再現者が演奏のさい作曲の過程に加わるといわれるが、「材料をほんとうに変えることにはならない」のであり、奔放なブレイクをしたとしても一定の型にはめられていて「再現者の自由が存在しないことは、芸術音楽の場合と少しも変わらない」 (ibid.: 126-7)。「再現は、その非人間性を糊塗するために、楽曲の殺伐な壁を飾り立てるのだが、まさに非人間性がかげで存続することに手を貸す結果に終わっている」 (ibid.: 127)。ジャズは「とくに硬直化し、紋切り型であり、使い古しである」 (ibid.: 133)。その様式はサロン音楽と行進曲の結合したもので、ジャズ・オーケストラの編成は軍楽隊のそれと等しく、「だからこそジャズは、お誂えむきにファシズムに利用されよ

うとしているのだ」 (ibid.: 134-5)。ジャズのねらいとは、「無力な主体がまさにその無力によって、さらに言えばその無力にたいして報いられなければならないならぬとでもいうように、集団に適応させられるところにある」 (ibid.: 144-5)。

このジャズ批判をどう評価すればよいか。アドルノ自身は、これを収めた1963年の『楽興の時』の序文で、この論文の執筆当時「ジャズの特異アメリカ的な様相」に知識が不足しており、「社会制度的なメカニズムを無視して、あまりに直接的に社会心理的な解釈がほどこされているのを、認めるのに吝かではない」 (ibid.: 10) と述べている。確かにこの論文で、なにを証拠にし、なにを基準にしてこうした批判をしているのか、疑問に思われる。とくに、批判の基準たる「自発的な音楽」とはどんなものなのか。

アドルノは渡米以降、プリンストン・ラジオ調査研究室での研究から「ラジオ音楽の社会的批判」「ポピュラー音楽について」「ラジオ・シンフォニー」といった論文を執筆するが (Adorno 1969=1973: 47-8)、そのひとつ1938年の論文「音楽における物神的性格と聴取の退化」は「ジャズについて」で見抜けなかった点を補ったもの (Adorno 1964=1969: 10) とされる。アドルノがアメリカで暮らしながら書いたこの論考を、次に見てみたい。

ここでアドルノは、一方でアメリカの大衆をとりまく音楽、とくに「娯楽音楽」を問題にする。ラジオから流れてくるのは「規格化された音楽商品」であり、それは娯楽が約束するはずのものを「与えると見せて、実は与えてくれない」。他方これを聴く人々は、「ラジオを聴きながら、耳から入って来るものに注意を払わない」でたんなるBGMとして聴き、趣味をもった個人として音楽を選択することができない (Adorno 1956=1998: 18-20)。かつて音楽は「反神話」「反権威」の要素をもったが、資本主義のもと「市場における成功という権威の証人」となり (ibid.: 24)、一方で月並みから逃避する「本格派

の作品」の売れ行きは皆無に近づき、他方で「成功の規格化」による人真似ばかりが流行することになって、中間の第三の選択をする余地は残されていない (ibid.: 30)。こうしてアドルノは、まず市場による音楽の規格化を問題にする。

これに対応して、「スターの原理はいまや全面的になった」と彼はいう。聴衆は音楽の実質に反応するのではなく、その音楽が成功していることに反応する。トスカニーニ (ムッソリーニに反抗してイタリアから亡命してきた彼はNBC放送局により「電波の元帥」となっていた)、ガーシュウィン、シベリウス、チャイコフスキー、シューベルトの未完成交響曲、これらが「ベスト・セラーのパンテオン」となり、著名な作品だから繰り返し演奏され、だからさらに著名になる (ibid.: 31-2)。「つつがなく広大な音楽生活の王国は、物神 (フェティッシュ) の国である」 (ibid.: 31)。スターや歌手の声やストラディヴァリの楽器といった感覚的な刺激要素が「物神化」され崇拝されて (ibid.: 35)、音楽そのものの「使用価値」ではなく「交換価値」(≒市場での成功) が快楽の対象となる (ibid.: 36-9)。

この物神化のもとで、音楽作品は本質的な変化をとげ下落する。強調や反復などで楽想の部分部分が聴衆の耳に叩き込まれることになり、音楽の全体の組織は解体されていく (その先駆はワーグナーであり、「音楽は物象化されるにつれて、疎外された耳にますますロマンチックにひびく」 (ibid.: 42))。また、そうした楽想が「同化しよしいもの」に編曲されていく (ibid.: 45)。この編曲の慣習はサロン音楽に由来するとアドルノはいうが、これによって「文化財」は「流行歌と似た娯楽の材料」になってしまう (ibid.: 48)。

では、聴き手の側はどうか。アドルノは「音楽大衆の意識は、物神化された音楽相応のものである」と述べる (ibid.: 52)。人々は型通りの聴き方しかできず、提供されたものに抵抗できずに「聴き方の退化」が進む。つまり退化した人間 = 幼児段階で発達が止まった人間の聴き方をして

おり、音楽を選択する自由や責任、音楽の意識的な認識を失って、「現にあるものどちがったもの」を認識する可能性を認めようとしない (気づかない、あるいはできれば根絶やしにしたがっている) (ibid.: 54-5)。彼らは自分たちに押し売りされているものをすすんで要求する (ibid.: 58)。彼らは注意を集中して聴く能力を失っており、その緊張に耐えられないため「あんまり正確に聴かないからこそなじるもの」に諦めて身を委ねる。流行の「商業ジャズ」はこの「注意分散」の態度で聴かれるからこそ、その機能を発揮できる (ibid.: 60)。こうした音楽は「認可ずみ」の、「安全無難という証明のお札」がついたもので (ibid.: 62)、彼らの「小児的な聴き方」にとって「もっとも安易な、すらすらと解けるような解決」として求められるのだ (ibid.: 66)。

このとき、「買い手のつく芸術音楽」はその代償として密度を落とさなければならない。逆に技法的に首尾一貫した大衆音楽は一変して芸術音楽となり、大衆の基盤を失うだろう。「市場を信奉する芸術家」によるものも、「大衆を信奉する芸術教育者」によるものも、このあいだの「橋渡しの試みのすべてが空しい」 (ibid.: 79)。音楽のこの両分野の緊張が増大したために、「物神化した大衆音楽が物神化した文化財を脅かしている」 (ibid.: 80)。そして、「音楽を磨き立てると同時に過度に露出するラジオ」が、こうした音楽からの疎外を助長している、こうアドルノは主張する (ibid.: 81)。

おそらくこのアドルノの「物神性」批判は、さきのジャズ批判よりは受け入れやすいもののように思う。確かに、アメリカに渡ってアメリカを見ながらアドルノはこの文章を書いた。だが次の疑問も感じられるだろう。アメリカでのいかなる証拠に基づいてこの主張を組み立てたのか。ラジオ調査プロジェクトのどんなデータがこれに活かされているのか。

アドルノ自身「証拠がどこにあるのか」という反論を気にしていた (Adorno 1969=1973: 31)。

「アメリカにおけるヨーロッパ系学者の学問的経験」で彼は、ジャズが「合理化や規格化」を受け、「計算され、操作された疑似自発性」「二番煎じの自発性」によることがアメリカでの経験で次第に明らかになった (ibid.: 31) とし、「物神性」論文はアメリカで得た音楽社会学上の新しい経験を概念化するための構図を描き、以後の研究のための準拠枠組を素描する意図があったと述べている (ibid.: 33)。しかし彼がラザースフェルドに案内されたラジオ調査研究室では「好き嫌い」や「番組のあたりはずれ」を調査しようとしており、「マス・メディアの分野における企画担当部門にとって役立つと思われるようなデータの収集に関心を持っている」ことだけはよくわかったと述懐している (ibid.: 34)。

プリンストン・ラジオ・プロジェクトはロックフェラー財団がスポンサーだったが、その研究綱領には「現代合衆国で実施中の商業ラジオ放送制度の枠内で行うべし」と明記され (ibid.: 35)、この枠内で被験者の反応を究極的な根拠とする研究がなされていた。アドルノにとってこれは皮相で誤ったものに見え、放送制度そのもの、その文化・社会的な結果、社会・経済的な前提を分析することが必要であり、対象者の主観的な反応が「実際にはどの程度まで被験者が想定するほど自発的で直接的なものであるのか」、それに「包括的な社会構造」や「全体としての社会」がどこまで影響を及ぼしているかこそ調査すべき問題と思われた (ibid.: 35-6)。たとえば被験者がある条件にきわめて強く影響を受けて反応した場合、その条件に気づくことはできず、(なんの影響も受けてないときと同様)「自分は自発的に反応した」と答えることになるだろう。とすれば、「自発性」はどう測定すればよいのだろうか (ibid.: 37)。あるいは、「もはや自発的な経験がほとんどできなくなってしまっている、物象化され、その大部分が操作可能なものへとってしまった意識」 (ibid.: 40) は、いかにして測定できるのだろうか。

アドルノは、この「自発性」の問題、「物象化された意識」の問題はアメリカに限られることではないが、アメリカではじめて気づいたと述べる。そして次の堂々めぐりに直面する。「一般的に用いられていた経験的社会学の規準にしたがって文化面での物象化現象を把握するには、物象化された方法を利用することしかない」。つまり、「科学とは測定することだ」という原則こそ物象化された意識ではないか。彼は「文化を測定せよ」と要請されたとき、文化とは「それを測定しようような精神を排斥する条件そのもの」だと考えたという (ibid.: 41)。アドルノが出会ったアメリカは、「実証されないものに対する懐疑主義」が「思考を拒否するという態度に転化しうる」世界だった (ibid.: 44)。ここにアドルノは、アメリカ的な「熟練したテクニシャン」あるいは「専門家」と、ヨーロッパ的な「知識人」すなわち「教養人」との対立を見 (ibid.: 46)、前者を拒否し徹底的に批判する。

【3】 以上のことを、ラザースフェルドの側から見てみよう。

ホルクハイマーがアドルノを呼び寄せたのは、ラザースフェルドの申し出によるものだった。彼は「アドルノを説いて、彼の思想を経験的調査に結びつけることができるか」試すのも価値があると考えて、心理学博士をもつジャズ・ミュージシャンのガーハード・ウィーベとアドルノを協働させることで「ヨーロッパの理論とアメリカの経験主義の一体化」ができると期待した (Lazarsfeld 1969=1973: 250-1)。しかし結果は期待を完全に裏切るもので、ふたりの協力は困難になり、ラジオ業界の人々にアドルノは大きな不信を生んでいた (この節冒頭の報告はこうした局面で送られた)。ラザースフェルドは事態の改善のためにアドルノに研究構想を覚書にすることを求めたが、その膨大な覚書は「物神」という概念が中心的役割を果たす難解なもので、ラザースフェルドには逆効果に思えるものだった (ibid.:

251)。彼はアドルノと話し、もっと明瞭に区別できる類型化をして質問紙によって音楽聴取者の諸類型の分布を定量的に把握できるようにすることで合意したが、この類型の指標は結局開発されなかった。なぜなら、「アドルノが打ち出した指示を経験的用語に翻訳することはまず不可能だったから」(ibid.: 253)。1939年秋にロックフェラー財団の研究費が更新されたが、音楽プロジェクトの予算継続は承認されず(ibid.: 254)、この不成功だったプロジェクトでのアドルノとラザースフェルドの協力関係は終わる。

1939年夏ラザースフェルドはアドルノに、次の厳しい言葉を記した手紙を送っている。

きみは、他の人たちをノイローゼにかかっており物神崇拜者だといって攻撃して自惚れているが、そういう攻撃にきみ自身もどれだけ当てはまるかを思ってみようとしなさい。……きみが著作のいたるところでラテン語を使うやり方が、完全な物神崇拜だと思いませんか？……きみの書いたものは、きみが仮説的前提に対する経験的チェックの仕方を知らないのではないかと疑わせるが、そうになると、きみが自分の考えとちがったありうべき諸々の考え方を尊重しない態度は、いっそう腹立たしいものになります。(Jay 1973=1975: 326)

しかし、その後もラザースフェルドは「社会研究所」とのかかわりを続ける。第二次世界大戦後「研究所」をコロンビア大学内に存続させるよう働きかけがあったが、それはラジオ調査研究室をコロンビア大学の「応用社会研究調査室」に移行させていたラザースフェルドによるもので、彼は「研究所」を調査室に統合しようと考えていた。彼はロバート・マートンなど学部メンバーにあてた1946年2月の手紙で、「研究所」の達成を称揚し、学部は「研究所」を誤解していたが、それは次のような事情だ、と述べている。

不首尾のすべては「研究所」のグループの頑迷のせいなのです。わたしは、かれらにもう何年も、ドイツ語で発表することはかれらを駄目にするようになるぞ、と言っていました。しかしかれらは、アメリカに対する自分たちの貢献は、かれらがこの国でドイツ文化の最後の砦になればいっそう大きくなるだろうという固定観念をもっていたのです。このことは、とくにかれらの『Zeitschrift』(年誌)についてそうでした。わたしは前の編集長であるローウェンタールに、この国で刊行された年誌10巻の簡単な内容分析をするように求めてあります。誰でも、そこにどれだけ価値多いものが埋められているかに驚かされるでしょう。(ibid.: 322)

社会学部はラザースフェルドの推薦に従って「研究所」を招聘したが、カリフォルニアにいた所長ホルクハイマーが健康上の理由(心臓病)をあげてついに実現しなかった。

コロンビア大学という「アメリカ」に地歩を築いたラザースフェルドと、これ以降ホルクハイマーとともに亡命者の「閉鎖的集団」に生き続けたアドルノ。アメリカに民主主義的な「水平的な影響の流れ」を見出したラザースフェルドと、資本主義によって規格化された音楽の「物神性」を見たアドルノ。——さてアドルノに戻ろう。1930年代にラジオとジャズのアメリカに見出したものを、その後彼がどう展開したかを次節で見ることにする。

4. ロサンゼルスへのアドルノ

——塞がれた耳と縛られた身体

【1】アドルノの回想によると、ラジオ調査計画での仕事が終わりに、1941年に彼と妻はカリフォルニアに移動した。病気を抱えていたホルクハイマーが温暖なこの地に移っており、ロサンゼルスで彼らは共同研究に没頭する。それが、1944年

に完成し47年にオランダの出版社からドイツ語で刊行された(だからなかなか読まれなかった)『啓蒙の弁証法』である。「哲学的断想」と副題がつけられたこの本はきわめて難解だが、まずこれまで述べたことと直接つながる「IV 文化産業——大衆欺瞞としての啓蒙」を検討したい。

この章でアドルノとホルクハイマーは、ラジオとジャズのアメ리카に「文化産業」という名を与える。映画・ラジオ・雑誌などはひとつのシステムを構成して、「鋼鉄のようなリズム」を謳歌し、個人は全体的な資本の力に服従しつつある(Horkheimer and Adorno 1947=1990:185)。このシステムは人々に「文化のモデル」を伝え、それによる大衆文化は独占態勢のもとで同一で、「金儲け目当てにつくられたガラクタ」である(ibid.:186)。聴衆の側を見ると、彼らはラジオによって「民主主義的に一律に聴衆と化し」、平均化された番組を受け入れてこれを支え、操作する側と聴衆の側の要求が循環して緊密なシステムをつくっている(ibid.:186-8)。有力な放送会社は電機産業に、映画会社は銀行に依存しており、文化産業の領域での統一化が政治の領域での統一化を反映して進む(ibid.:189)。紋切型の批判にも見えるが、彼らの目に映った「文化産業」はこうしたものだった。

具体的な論点として第一にあげられるのは、文化産業がある意図のもとに統一的規格を押しつけているという批判である。文化産業の企業、プロダクション、プロデューサーがねらった図式主義は「意図的性格」をもち、すべてが「レディメードの紋切型」となる。流行歌は「胸にジンと来るような効果を持つ短い音程の連なり」、映画やドラマは「結局誰が誉められて、誰が罰を受けるか」がすぐわかるプロットによって成り立ち、技術的な細部による効果を優先させる(ibid.:191-3)。その結果、「全世界が文化産業のフィルターをつうじて統率される」(ibid.:194)。たとえばトーキー映画が日常を人工的に製造することで「観客たちが想像や思考を働かせる余地」を奪

い、文化消費者の想像力や自発性を委縮させて彼らを型通りの人間にする(ibid.:194-5)。ジャズのアレンジャーは即興的な不協和音を排除し、図式の枠にはめこんでしまう(たとえば、モーツァルトをジャズ化する)(ibid.:196)。文化産業はこうした「《様式の統一》と呼んでもさしつかえない非文化の体系」(ニーチェ『反時代的考察』の引用)を生むと彼らはいふ(ibid.:198)。

次に、彼らは文化産業による「娯楽」に批判を加える。「市民的・啓蒙的原理としての、娯楽の原理」とは「浮かれている」ことで、「現状を承認」という本質をもつ。社会全体の動きに目を塞ぎ、「苦しみがあっても、それは忘れよう」とする自己愚化と無力さを生み、「娯楽が約束する解放とは、思想からの解放であり、また否定からの解放」だといふ(ibid.:221-2)。大衆文化には悲劇も導入されるが「すでに勘定に入れられ肯定された世界の要素」にされており、「検閲済みの幸福の味気なさを興味深いものに」するだけである(ibid.:232)。文化産業は、野蛮な本能や革命的な本能を抑制するのに寄与してきた「文化」の仕上げをして、「苛酷な生活をとにかくなんとか続けてゆける条件」を人々に教え込む(ibid.:233-4)。ここでは「個人」が消滅する。スカウトに探し出され売り出されるタレントは「独立性を欠く新中間層の理想形」であり、「すべて任意の誰かと取り換えることのできるもの」でしかない(ibid.:222-3)。「個人が容認されるのは、一般的なものとあますところなく同一化している」かぎりであり、ジャズの規格化された即興演奏(またジャズ!)から個性派映画スターまで「疑似個性」だけが生まれる(ibid.:236)。

そして、文化産業は広告と結びつく。文化産業が提供する商品はすべて取り換えがきくもので、「ラジオや映画の大部分がなかったとしても、おそらく消費者がたいして困ることはまずない」(ibid.:213)。これが価値をもつのは使用価値としてではなく、人々がその作品のランクと誤解している社会的評価に由来する(ibid.:242)。だか

ら広告によって他より人気があるとランキングされたものがより多く要求され、ラジオ業者が求める広告料を支払える者だけが商品を流通させることができる (ibid. : 247)。アメリカではラジオは聴衆から料金を徴収せず、「特定の利害や党派を超えた構成という欺瞞的形式」を獲得する。ここからアドルノたちはこう述べる。「それはファシズムにとっても同じくおあつらえ向きのものだ。そこではラジオは総統があまねく呼びかける口となる。……国家社会主義者たち自身、ラジオは、宗教改革にとっての印刷機同様、彼らの仕事に形を与えるものだということをわきまえていた」 (ibid. : 243)。トスカニーニの慈善演奏中継にとってどの交響曲かはどうでもいいのと同じように、総統演説も内容はどうでもよく、重要なことはラジオによってどこへでも彼の声が押し入っていくことであり、ラジオは打ってつけの媒体である (ibid. : 243)。粉石鹼の広告を流すのと同じように、「総統はもっと近代的に、遠慮会釈なく、ガラクタを処理するように、あっさりホロコーストの命令を下す」 (ibid. : 244)。ここで、アメリカでのトスカニーニのラジオ演奏とドイツでのヒトラーのラジオ演説がほぼ同じものとみなされ、文化産業は「ファシズム」を生み出すと彼らはいう。

文化産業とくにラジオからの言葉は、啓蒙過程による「言語の非神話化」をへた言葉を「魔術」へと逆転させ、記号から呪文へと変化する (ibid. : 250-1)。ポピュラー・ソングがあつという間に広がるのと同様に、ファシストの「忍びがたい」という叫びは翌日には民族全体に広がり、商品の名を連呼して売れ行きを高めるのと同じように「特定の言葉をひたすら目まぐるしく繰り返して広く流すことによって、宣伝と全体主義的スローガンが結びつく」 (ibid. : 252)。ナチのアナウンサーが「こちらヒトラー・ユージェント」と呼びかける抑揚は数百万人の発音の手本となり、一語一語が「もうまるごと全体主義的なものになってしまった」 (ibid. : 253)。ここには「文化商品

に対する、消費者の強制されたミメシス」が見られる。人々の言葉づかいや振る舞いに自由はなく、ニュアンスにいたるまで「文化産業のシェーマによって、前よりいっそう強力に貫かれることになる」 (ibid. : 254)。

さて、カリフォルニアで執筆されたこの「文化産業」への診断をどう評価すればいいのだろうか。これを、ニューヨークにいたラザースフェルドが読んだらどう思うかを想像してみよう。おそらく彼はこの批判にどんな実証的根拠があるのか、と首を傾げるだろう。そして同時に、アメリカの文化産業とドイツでのナチによる宣伝を同じに見てよいのだろうか、という疑問をもつのではないだろうか。ラザースフェルドが実証したのは、ラジオがどんな商品広告や政治キャンペーンを流したとしても直接人々を動かすことはできず、人々の関係によりはじめて効果をもつ、しかもその関係は「垂直的」であるより「水平的」である、ということだった。しかし、アドルノたちはラジオが人々に圧倒的な効果をもち、それによって彼らは規格化、愚鈍化、欺瞞されると考え、それはアメリカでもドイツでも同じだ、と受け取れる叙述をする。そして、このように「個人」が消え失せ、人々が扇動されるのは、「啓蒙」そのものが孕む傾向なのだとさえ考える。

遡って『啓蒙の弁証法』序文と「I 啓蒙の概念」というより抽象度の高い部分を見てみると、この主張が明確にわかるだろう。さらに難解なこのテキストを、次に検討しよう。

【2】『啓蒙の弁証法』序文でアドルノたちはこう述べる。この本のねらいは、なぜ人類は「真に人間的な状態に踏み入っていく代りに、一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでいくのか」を認識することである (ibid. : ix)。いまやわれわれは「啓蒙の自己崩壊」 (ibid. : xii)、「啓蒙が神話へと逆行していく」 (ibid. : xiii) 事態に直面している。その原因は、「真理に直面する恐怖に立ちすくんでいる啓蒙そのもの」に求められなければならない

(ibid. : xiii)。啓蒙的思想はその概念自体に「今日いたるところで生起しているあの退行への萌芽を含んでいる」(ibid. : xii)。これを認識することが求められる、すなわち「啓蒙は自己自身について省察を加えなければならない」(ibid. : xv)。だが学問の伝統は「実証主義を奉じる清掃業者の手によって、無用のガラクタとして忘却に引き渡され」ており(ラザースフェルドのことか?)、学問の意義自体が疑わしくなっている(ibid. : ix-x)。なされるべきは「虚偽の明晰さ」を拒否し、「物象化の否定」という精神の真の関心事を回復することだ(ibid. : xvi)。

このねらいは十分に理解できるものだろう。では、「啓蒙」という概念をそもそもどういうものにとらえればいいのか。「I 啓蒙の概念」に移ろう。

古来「進歩的思想」という最広義での啓蒙が追求してきた目標は「人間から恐怖を除き、人間を支配者の地位につける」ことであり、そのプログラムはマックス・ヴェーバーがいうように「世界を呪術から解放すること」、神話を解体し知識に置き換えることだった(ibid. : 3)。印刷機、大砲、羅針盤、洗練された印刷機としてのラジオ(またラジオ!)、高性能の大砲としての爆撃機、高精度の羅針盤としての無線は自然と人間を支配するための道具となる。これらを使うとき、「真理」を手にすることよりも「操作」が重要となる(ibid. : 4-5)。

「世界の呪術からの解放」とはアニミズムを根絶することであり(ibid. : 5)、神話の基礎である「自然を人間になぞらえる見方(Antropomorphismus)」を清算することである(ibid. : 7)。啓蒙の理想は「すべての個々のものが導き出される体系」(ibid. : 8)であり、外れたものは「神話」として犠牲にされる(ibid. : 9)。こうして「神話は啓蒙に移行し、自然はたんなる客体となる」。啓蒙が事物に対する態度は、独裁者が人間に対する態度と同じであり、独裁者は人間を「操作」しようとし、啓蒙は事物を「製作」

しようとする。このために認識された「同一性」は、そこからはみ出る「質の充実の放棄」を代償として自然を統一することになるだろう(ibid. : 10-1)。たとえば神話時代の犠牲における身代わり(女兒の身代わりに牝鹿、男児の身代わりに子羊)は「選ばれた者としての一回性」「神聖性」によって「さし代えようにもさし代えのきかないもの」とされたが(これが「質」、科学にとってはただの獣にすぎず、「普遍的な代替可能性」に転化する(ibid. : 12)。啓蒙は「通約しきれないものを切り捨てる」。質的なものが消去され、人間も画一化されて他者と同質的な自己となって、「個々人の否定」(ibid. : 15)、「すべてが水平化され、結局解放された人々自体が、啓蒙の成果としてヘーゲルが指摘したあの「群」になるという事態が生じる。アドルノたちは、「マナ」という宗教的原理を「あらゆる見知らぬもの、異様なもの、つまり経験の範囲を超えているもの、これまで知られていた事物のあり方を超えているものの総称」(ibid. : 17-8)とするが、これは啓蒙にとってあってはならないとされるのだ。

たとえばカントの『純粹理性批判』は、「自然支配が画する圏の中へ……思考を封じこめた」と彼らは指摘する。カントにとって科学によって究めつくせない存在はこの世にはない、ということは、「理性がすでに対象のうちに見込んでおいたものが、再認識されるだけ」ではないか(ibid. : 33)。「数学的形式主義」は数で表すことができる直接的なもの・事実的なものに思考を繋ぎとめ、認識はこの反復に極限され、思考は単なるトートロジーになるのではないか(ibid. : 34)。だから、「啓蒙は神話に対して神話的恐怖を抱いて」おり、「あらゆる自然的な痕跡」を神話的なものとして方法的に消し去り、認めることができない(ibid. : 37)。「動物的であれ、植物的であれ、純粹に自然的な存在」は文明にとって絶対的な危険となり、「ミメーシス的、神話的、形而上学的な態度行動様式」への後戻りは「自然そのままへ」引き戻される恐怖を呼び起こす(ibid. : 39-40)。

「啓蒙された精神は、あらゆる非合理的なものに、破滅を導くものとして烙印を押し、その烙印をもって、火あぶりと車裂きの刑にとって代えた」(ibid.: 40)。啓蒙は非合理的なものにただ恐怖するだけで、扱うすべをもたないのではないかとアドルノたちはいう。

彼らはこのことをより明確に伝えるために、ホメロス『オデュッセイア』のセイレーンたちの誘いの場面をとりあげる。オデュッセウスたちの帰路の航海のさい、セイレーンたちの歌が誘惑する(また音楽!)。芸術は「実践と手を切る」ことで「社会の実生活から寛容にあつかわれる」ようになるが、セイレーンの歌は「まだそういう芸術になるほど無力化されてはいない」、だから「その歌声を聞く者は誰一人として逃れることはできない」(ibid.: 42-3)。つまりこの歌は「自然」「非合理的なもの」に人を引き戻す力をもつ。

この誘惑に対し、オデュッセウスはふたつの脱出法をとる。ひとつは、彼の同行者(部下)たちに耳を蠟で塞ぐよう命じ、彼らは渾身の力で船を漕ぐ。「生き残ろうと欲する者は、取り返しのつかないものの誘惑に耳をかしてはならないし、耳をかさないようにするためには、誘惑の歌が聞こえないようにしなければならない。……労働する者たちは、生き生きと脇目もふらずに前方を見つめ、傍に何が起ろうとも構ってはならない」(ibid.: 44)。

もうひとつ、オデュッセウス自身はセイレーンの歌を聞くが、自らを帆柱に縛りつけ動けなくする。こうすることで彼は「他人を労働させる領主」の社会的役割から脱出できなくなり、誘惑の歌を聞いてもなにか結果が生まれるのではなく、ただ瞑想の対象である「芸術」としてそれを聞くだけとなる。「縛りつけられている者は、いわば演奏会の席に座っている。後代の演奏会の聴衆のように、身じろぎもせずじっと耳を澄ませながら」(ibid.: 44-5)。ここには「支配と自己制御の機構」としての精神しか存在しない(ibid.: 47)。塞がれた耳(労働者)と縛られた身体(支

配者)。ここで世界の質(セイレーンの歌)は消え、すべてが機能へと換算され合理化された労働の対象となる。「今日の大衆の退歩は、自分の耳をもって聞こえがたいものを聞き、自分の手をもって把えがたいものに触れることができない無能さのうちに現われる」(ibid.: 47)。この漕ぎ手たちも、「工場や映画館やコルホーズでの近代の労働者」もみな「同じ拍子につれて動くように拘束されている」(ibid.: 48)。

自然を支配しようとして道具をつくる。このことは同時に、「すべての人を手中に収めようとする支配の道具」、言語、武器、機械などが自立性を獲得し合理化されることを意味する(ibid.: 48)。自然も客体となり、人間も客体となる。「人間を自然の暴力から連れ出す一歩ごとに、人間に対する体制の暴力が増大していくという状況の不条理さは、理性的社会の理性を、陳腐なものにすぎないとして告発する」(ibid.: 50)。人間は自然を支配しようとして自然から距離をとるべく概念という「観念的な道具」を用いるが、そこで主体と客体は分裂してしまう。自然は「マナとして、直接に呼びかけられる」のではなく、「盲目のもの、不具にされたもの」(ママ)としてのみ呼びかけられる(ibid.: 51-2)。

啓蒙は「啓蒙の実証主義的契機を押し進めることに夢中に」なり、「ただプロトコル命題」(直接に観察でき検証できる命題)だけを検証することになる(ibid.: 53)。こうして思考そのものの内部にまで支配が及び、思考は「数字、機械、組織といった物象化した形」をとることになるが、これは思考を放棄するに等しく、このとき啓蒙は自己自身の実現を断念することになる。「啓蒙はすべての個別的なものを自己の制御下に置くことによって、事物に対する支配として逆に人間の存在や意識にはねかえってくる自由を、概念的には捉えがたい全体の手に譲りわたしてしまった。社会は人の意識を喪失させることによって思考の硬化をもたらす」(ibid.: 54)。啓蒙は「盲目の支配の原理をあえて止揚する」ときに、自己を実現す

ることができ、「支配の解消へと移行すること」ができる。しかし、いま啓蒙は、その可能性があるにもかかわらず「現代に奉仕して、大衆に対する全体的な欺瞞へと転身する」という事態に陥っている (ibid.: 55)。

【3】問いを確認しよう。ここでは、なぜ人類は「真に人間的な状態に踏み入っていく代りに、一種の新しい野蠻状態へ落ち込んでいくのか」、「啓蒙の自己崩壊」、「啓蒙が神話へと逆行していく」という事態がなぜ生じるのか、が問われたのだった。以上で示された答えの焦点は、人間が自然を支配することで合理性によってしか自然を把握できなくなり、その非合理性に対処できなくなったこと、自然を支配するべく組織された社会において人が人を支配するために理性が利用され、これを思考する概念をもちえていないことにあるだろう。理性によってとらええない支配されざる自然や人間を把握するのが精神あるいは広義の「啓蒙」の役割だが、啓蒙は支配の相でしか自然も人間も認識できない。これが「啓蒙の自己崩壊」の要因ではないか、との主張である。

一方でこれは、強い説得力をもつ主張だと思われる。たとえばオデュッセウスの物語に託した「塞がれた耳」と「縛られた身体」の対比は、おそらくアドルノにとって彼が直面する問題の根本的な構図を抽出したものでなかっただろうか。自然の呼び声を感じる「耳」を塞がれて、道具によって自然に働きかけることしかできない生産主体としての労働者。自然の呼び声を聞くことはできるが、それに働きかける身体を喪失して、ただ困り込まれた「芸術」としてしかそれを実現できない支配者。ここには、ラジオとジャズのアメリカに対する省察のひとつの到達点が見られるようにも感じられる。

しかし他方、この文章を読んである失望も感じるだろう。たしかにこれは「啓蒙」に対するじつにラディカル（根本的）な批判である。だが、ラディカルであればあるほど、これは啓蒙や文明や

理性すべてにあてはまるように見える。啓蒙それ自体を問いの対象としているのだから、そこではアメリカとドイツと古代ギリシアの差異は小さなものになってしまう。でもそれでよいのだろうか。アメリカはなぜこのような民主主義社会であり、ドイツはなぜあのような全体主義社会になったか、仮にどちらでも啓蒙が自己崩壊するとしてそれがどう違った「自己崩壊」なのか、これを知る必要があるのではないか。

おそらく、「文化産業」、たとえばラジオの力によってファシズムが発生した、というのはあまりにも表層的な命題だろう。他方、「啓蒙の自己崩壊」としてファシズムが誕生した、というのはあまりにラディカルで、逆ににも説明しない命題に見えてしまう。ラザースフェルドならこう尋ねるだろう、アドルノよ、この仮説をどう実証するのか。またこうも尋ねたくなる、アドルノよ、この主張が正しいとして私たちはどうしたらいいのか。問われるべきは「ラジオ」と「啓蒙」のあいだ、これらを媒介する水準にあるのではないだろうか。この水準に照準することなしには、1944年のカリフォルニアがなぜ安全な場所であり、フランクフルトがなぜ危険だったかを解明することはできないのではないか。

このあいだの水準にアドルノが挑んだ試みのひとつが、1950年に彼とアメリカ生まれの社会心理学者たちが刊行した『権威主義的パーソナリティ』である。ここでアドルノは、失敗したラザースフェルドとの共同研究とは対照的に、実証的調査によって全体主義や反ユダヤ主義について説明を加えようとする。だが、この内容を検討することは、本稿では紙幅の関係でできない³⁾。最後の節では、簡単なまとめをして稿を閉じることしよう。

5. おわりに——アドルノのアメリカ

アドルノは1949年の晩秋ドイツに帰国し、フランクフルト大学での教授活動と社会研究所の再

建に追われる。その後アメリカには、1951年の短期間と、52年の約1年間ビヴァリーヒルズのハッカー財団に研究主任として滞在しただけだった(Adorno 1969=1973: 67)。

フランクフルトへの帰還は同市がホルクハイマーに行った招請に応えたものだったが、彼に同行して帰国を熱望したのはアドルノただ一人だったという(Jay 1973=1975: 414)。アドルノは後年、その客観的理由として言語をあげ、ドイツ語が「哲学に……特別な親和力をもっているから」と述べる(ibid.: 414)。第3節で見たように「自分自身のことを徹底的にヨーロッパ人」とみなしたアドルノは(Adorno 1969=1973: 28)、「亡命している間中……片時も帰国の望みを捨てなかった」(Jay 1973=1975: 435)。

アドルノにとってアメリカとはなんだったのか。マーティン・ジェイの論文「アメリカにおけるアドルノ」は、1969年の死亡当時彼は「アメリカでは、ほとんど『権威主義的パーソナリティ』の表紙の筆頭著者としてしか知られていなかった」という(Jay 1986=1989: 210)。アメリカ社会に受け入れられないからドイツ語の集団に閉じこもり、閉じこもるからさらに受け入れられなくなるという悪循環を彼は経験したのだろう。彼は「アメリカ文化にまったく愛情をもっていなかった」のであり、渡米前のジャズ論に記された「偏見を本当に克服することはできない」(Jay 1984=1992: 43) ままアメリカを去ったともいえる。

アドルノ自身はその回想でこう述べている。「私がアメリカで学んだと思われる事柄」といえば、第一に「ものごとを自明視」しなくなり、文化への素朴な信仰から解放されて「文化を外側から眺める能力を身に付けた」ことである(Adorno 1969=1973: 70)。ただ、さらに根本的で幸運だったのは、「民主主義的諸形式の実質的内容を経験できたこと」だと彼はいう。ドイツではゲームの形式的規則以上ではなかった「民主主義的形式」が、アメリカでは生活の全領域に浸透

しており、「古いヨーロッパではめったにお目にかかれない真の寛大さなるものの潜在的基盤」をなしている。これは「1933年から1945年にかけてドイツで爆発した、鬱積した怨恨や嫉妬とは鋭い対照を見せている」(ibid.: 71)。「アメリカにおけるファシズム的な潮流に対する抵抗力は、おそらくヨーロッパのいかなる国におけるよりもはるかに強力だといってよい」、ただしイギリスという例外を除けば(ibid.: 72)。

だが、彼はこうもいう。「だからといって、私はなにもアメリカが全体主義的な支配形態の方向にひっくり返る危険性から完全に免れている、などというつもりはない。というのも、こうした危険性は現代社会そのものの傾向に固有のものだからである」(ibid.: 72)。とくにアメリカは「資本主義をほとんどその完全な純粋性の状態で示しており、資本主義以前の遺物はなんらそこには見当たらない」、だから「現代文化における文化自らが招いた過ち」(ibid.: 73)、すなわち「文化が社会的現実のなかで自らを実現化するのではなく、精神という孤絶した領域のなかに自らを閉じこめてきたことによって招いた罪」に対する自己懲罰が生じるのではないか。資本主義のもとでヨーロッパもアメリカも第三世界も、その空港をみればわかるように、質的差異がなくなっている。これが徹底的に進んでいるのがアメリカであり、そこでは「区別の欠如と平均値の絶対化の危険性」をとまなう「量的思考法」が支配している。その帰結がどうなるかを、アメリカの経験は考えさせる。もちろんこの罪の帰結は「アメリカにおいても起りはしなかった」ので、明示はできない。しかし「こうした事態の現実化の可能性は、ヨーロッパにおけるほど遮られてはいない」(ibid.: 74)。「現代の文化」がもつ帰結——それは『啓蒙の弁証法』で「啓蒙の自己崩壊」として描かれたものとはほぼ等しいだろう——がアメリカでもっとも純粋に発現するのではないか。ヨーロッパとは別の「民主主義」を実現しているアメリカが、同時に「啓蒙」や「文明」の(病理的な)帰結にも

もっとも近いのではないか。この回想は、こうした屈折したアメリカへの診断によって閉じられる。

ドイツ語を捨てずに中欧出身者の集団に閉じこもり、アメリカにほとんど影響を与えなかったドイツからの亡命者アドルノは、「資本主義のアメリカ」をラジオ音楽の物神性をめぐって徹底的に批判し、「民主主義のアメリカ」を評価しつつ啓蒙の逆説的帰結が潜在することを発見して、あらゆる「啓蒙」や「文明」をラディカルに批判した。これは、中欧訛りを残した英語でアメリカに適応し、その社会学に強い影響を与えたオーストリアからの亡命者ラザースフェルドが、「資本主義」も「民主主義」もアメリカでは水平的な集団によって媒介されるとらえたのとは対照的といえるだろう。振り返るならば、彼らは故国とともに社会主義者だった。そして、故国の全体主義を逃れてアメリカに亡命後、その「資本主義」と「民主主義」への評価はこれほど異なるものとなった。これを彼らがアメリカで置かれた境遇によって説明するのはもちろん明らかに乱暴だろう。ただ、彼らが展開した社会学が、アーレントのいう「生まれ故郷を喪失」し、「生身の人間以外の何者でもない」地点にいたことに強く影響されていることは、やはりまちがいないように思われる。

注

- 1) 本稿は『社会学の歴史』（有斐閣より刊行予定）の草稿の一部を本紀要のために改稿したものである。2012年6月20日に立教大学社会学研究科院生例会で報告したさいコメントいただいた生井英孝氏、黒田暁氏、院生のみなさんに感謝する。
- 2) キャントリルは『火星からの侵入』の著者だが、その「序」にプリンストン・ラジオ・プロジェクトについて記している（Cantril 1940=1970：iv）。
- 3) 社会研究所はドイツなどヨーロッパ諸国での調査（アドルノは不参加）に基づき1936年に『権威と家族に関する研究』を刊行したが、ここでは「権威主義的、革命的、両価的」という三つの心理類型を抽出している（Jay 1973=1975：184-5）。こ

れに対し、アメリカでの調査による『権威主義的パーソナリティ』では、「権威主義」の対極に「真のリベラル」（Adorno et al. 1950=1980：473）つまり民主主義的パーソナリティが置かれ、革命的パーソナリティを志向した前者と明らかな相違を見せている。

参考文献

- Adorno, T. W., 1956, *Dissonanzen, Musik in der verwalteten Welt*, Verlages Vandenhoeck und Ruprecht. = 1998（三光長治・高辻知義訳）『不協和音——管理社会における音楽』平凡社。
- , 1964, *Moments musicaux*, Suhrkamp Verlag. = 1969（三光長治・川村二郎訳）『楽興の時』白水社。
- , 1969, “Scientific Experiences of a European Scholar in America,” in D. Fleming and B. Bailyn eds., *The Intellectual Migration: Europe and America, 1930-1960*, Harvard University Press. = 1973（山口節郎訳）「アメリカにおけるヨーロッパ系学者の学問的経験」、『亡命の現代史 4 社会学者・心理学者』みすず書房, 25-76。
- Adorno, T. W., E. Frenkel-Brunswick, D. J. Levinson and N. Sanford, 1950, *The Authoritarian Personality*, Harper and Brothers. = 1980（田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳）『権威主義的パーソナリティ』青木書店。
- Arendt, H., 1943, “We Refugees”, *The Menorah Review*, Vol.31, 69-77. = 1989（寺島俊徳・藤原隆裕宜訳）「われら亡命者」、『パリアとしてのユダヤ人』未来社, 9-31。
- Cantril, H., 1940, *The Invasion from Mars: A Study in the Psychology of Panic*, Princeton University Press. = 1971（斎藤耕二・菊池章夫訳）『火星からの侵入——パニックの社会心理学』川島書店。
- Coser, L. A., 1984, *Refugee Scholars in America: Their Impact and Experiences*, Yale University Press. = 1988（荒川幾男訳）『亡命知識人とアメリカ——その影響とその経験』岩波書店。

- Fermi, L., 1968, *Illustrious Immigrants: The Intellectual Migration from Europe 1930-41*, The University of Chicago Press.=1972 (掛川トミ子・野水瑞穂訳) 『亡命の現代史1 二十世紀の民族移動1』, 『亡命の現代史2 二十世紀の民族移動2』 みすず書房。
- Horkheimer, M. and T. W. Adorno, 1947, *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*, Querido Verlag. = 1990 (徳永恂訳) 『啓蒙の弁証法』 岩波書店。
- Hughes, H. S., 1975, *The Sea Change: The Migration of Social Thought 1930-1965*, Harper and Row.= 1978 (荒川幾男・生松敬三訳) 『大変貌——社会思想の大移動 1930-1965』 みすず書房。
- Jay, M., 1973, *The Dialectical Imagination: A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*, Little Brawn and Company.= 1975 (荒川幾男訳) 『弁証法的想像力——フランクフルト学派と社会研究所の歴史 1923-1950』 みすず書房。
- , 1984, *Adorno*, Harper Collins Publishers=1992 (木田元・村岡晋一訳) 『アドルノ』 岩波書店。
- , 1986, *Permanent Exiles: Essays on the Intellectual Migration from Germany to America*, Columbia University Press.=1989 (今村仁司他訳) 『永遠の亡命者たち——知識人の移住と思想の運命』 新曜社。
- Katz, E. and P. F. Lazarsfeld, 1955, *Personal Influence: The Part Played by People in the Flow of Mass Communications*, The Free Press.=1965 (竹内郁郎訳) 『パーソナル・インフルエンス——オピニオン・リーダーと人びとの意思決定』 培風館。
- Lazarsfeld, P. F., 1969, "An Episode in the History of Social Research: A Memoir", in D. Fleming and B. Bailyn eds., *The Intellectual Migration: Europe and America, 1930-1960*, Harvard University Press.=1973 (今防人訳) 「社会調査史におけるひとつのエピソード: メモワール」, 『亡命の現代史 4 社会学者・心理学者』 みすず書房, 181-282。
- Lazarsfeld, P. F., B. Berelson and H. Gaudet, 1944, *The People's Choice: How the Voter Makes His Mind in a Presidential Campaign*, Columbia University Press.=1987 (有吉広介監訳) 『ピープルズ・チョイス——アメリカ人と大統領選挙』 芦書房。
- Young-Bruehl, E., 1982, *Hannah Arendt: For Love of the World*, Yale University Press. = 1999 (荒川幾男・原一子・本間直子・宮内寿子訳) 『ハンナ・アーレント伝』 晶文社。